

今なぜ日本語力が求められているのか

－「ことばの大切さ」に気づく契機として－

代ゼミライセンススクールでは、日本語の知識とその正しい使い方を、オリジナルテストと解説動画より学ぶことができる「日本語検定[®]で学ぶ！日本語力アップ教室」を2018年10月1日に開講しました。代々木ゼミナール教育総合研究所の船口主幹研究員に、今、なぜ日本語力が求められるのか、お話を伺いました。



代々木ゼミナール教育総合研究所
主幹研究員 船口明氏

日本語が危機的状況にある、と言われている。

言うまでもなく、言葉の危機はそのまま「思考」の危機につながります。

「この状況のイメージをカンキして見てください」

と言われた時、「喚起」という語を知っているのか、それとも「歓喜」や「換気」を思い浮かべて、頭の中に「？」が並ぶのか…。

今の子どもたちは、おそらく一般の大人が想像している以上に言葉を知りません。その状況は間近に高校生を見てきた僕ですら「驚嘆」するほどです。

より具体的にお話をしてみたいと思います。

たとえば、受験を目前に控えた高校三年生、それも関西でも有数の有名進学校の生徒に漢字テストをしたとします。

- ・「我々にシサを与える」
- ・「新年を出発のケイキにする」
- ・「標準語をショウレイする」

「我々に示唆を与える」や、先の「イメージを喚起する」が書けるのは三分の一程度、「新年を出発の契機にする」で半数、「標準語を奨励する」に至ってはほぼ書けません。単に「言葉は知っ

ているけれど書けない」だけかと思っ

て聞いてみると、多くの生徒はなんと言葉自体を知らない。特に理系の男子は惨憺たる状況です。彼らは決して落ちこぼれではありません。その学校でも上位の生徒、みんな現役で京大や医学部をはじめとする超難関大学に合格してくる層なのです。

「理系ならばそれも仕方ののではないか」と思われるかもしれませんが、経験的に見て、同じ学校の10年前の生徒なら、ほぼ100パーセント書けたはず。それが今はことごとく書けない。そんな危機的な状況が、地域を代表するような学校で起こっています。

とはいえ、彼らは真面目で頭もいい。再テストをするとほぼ100点になります。そしてあっけらかんと、

「だって、今まで覚えてって言われたことがないもん」と笑顔で答えます。教育の質の変化が、ポディーブローのように効いてきているように思えてなりません。

予備校講師としてこのような状況に直面してきた折、今回の「日本語検定

で学ぶ！日本語力アップ教室」を担当させて頂くことになりました。「日本語検定」の問題は、「語彙、文法、敬語、表記」など、様々な項目についてバランスよく、しかも要点をコンパクトにチェックできる優れたテストです。子ども達が「日本語検定」に取り組む中で、「ことばの大切さ」に気づく契機になれば嬉しいな、と思いつながら講義を担当しました。短時間の講座ですが、彼らが「引き続き、本格的に日本語検定に取り組んでみよう！」と思ってくれるような内容を心がけたつもりです。ぜひ視聴いただければと思います。

最後に。

「日本語検定」が「ことばの大切さ」に気づく契機となるというのは、実は子ども達だけではありません。常識的な日本語を運用できる（しているつもりでいる）大人でも、「日本語検定」による気づきや発見はたくさんあります。

「時節柄、お身体ご自愛ください。」などは、その最たる例です。普段、何気なく使っている人が多い表現ですが、正しくは、下線部は不要なのです。